



## 取組と交流

### 対州馬とのふれあいと理解による周知活動

対馬市では、「対州馬を活かすにはまず子どもから」と考え、子ども世代にフォーカスした普及・啓発を行っています。

取組と交流



### ◆ 保育所・学校での乗馬体験

対馬の子ども達の中には、対馬に馬がいることを知らない子も少なくありません。まずは存在を知ってもらい、「かわいいな、好きだな」と思うてもらうことが大切だと考え、ふれあいと乗馬体験を園庭・校庭で実施しています。飼育施設での体験学習も積極的に行っています。

対馬での郷土学習では、国指定天然記念物であるツシヤママネコについて学ぶ機会が多く、対馬市民に一定の理解が定着していますが、対州馬についても同様に継続した学習が認知度アップにつながることを期待しています。

### ◆ 子ども乗馬教室（対州馬少年倶楽部）

より深く対州馬の魅力を伝えたいと考え、令和3年度から対州馬が大好きな子ども達を対象に子ども乗馬教室を実施しています。

乗馬だけでなく、馬のお世話や馬小屋の掃除、調教等、幅広く経験する中で馬の気持ちを知り、友人や家族の気持ちを理解できる子どもに育てほしいと考えています。

また、この活動の中で、対州馬保存の次代の担い手が育つことを期待しています。

### ◆ 仙台との交流

対州馬少年倶楽部のメンバーは、対州馬が動物園にいることをご縁に、宮城県仙台市にある乗馬倶楽部とのオンライン地域間交流を行っています。

他にも共通点がないか調べていくと、仙台藩主であった伊達政宗公は、朝鮮出兵の際に対馬にきたことをきっかけに対馬藩主宗義智と親交があったようです。その後息子の宗義成は、国書偽造について部下の柳川調興が幕府に暴露されるという前代未聞の大事件(柳川一件)に巻き込まれるのですが、政宗公は宗義成をサポートしたというエピソードが残されています。

仙台、対馬の交流の新たなステージを、対州馬をキーワードに切り開いていきます。

### ◆ 対馬生まれの対州馬がいるところ

#### 【島外】

- ・ 東横イン比田勝
- ・ 富山市ファミリーパーク
- ・ 目保呂ダム馬事公園
- ・ 九十九島動物園森きらら
- ・ 長崎県大村市 WARANAYA CAFE



## 第2部 対州馬の歴史

### 対馬に馬が伝来した時期と対州馬のルーツ

「日本に馬が最初に渡来したルート」については、研究者の間でも様々な論争がありました。現在は、遺伝学的、考古学的知見から、単一起源説が支持されています。これらの研究や対馬の馬について記す文献情報から、対馬の馬のご先祖について推論してみたいと思います。

#### 【遺伝学的知見】

戸崎ら(2019)は、日本在来馬のルーツはすべてモンゴル在来馬であり、さらに日本8在来馬のうち、野間馬と対州馬が、比較的モンゴル在来馬と遺伝的に近縁であると報告しています。

#### 【考古学的知見】

西河原ら(1989)は、国内で最も早期に馬骨や馬具が出土するのは九州北部であり、古墳時代前期(3-5世紀)と報告しています。現在、他の研究者の研究成果からも、4-5世紀とするのが主流です。

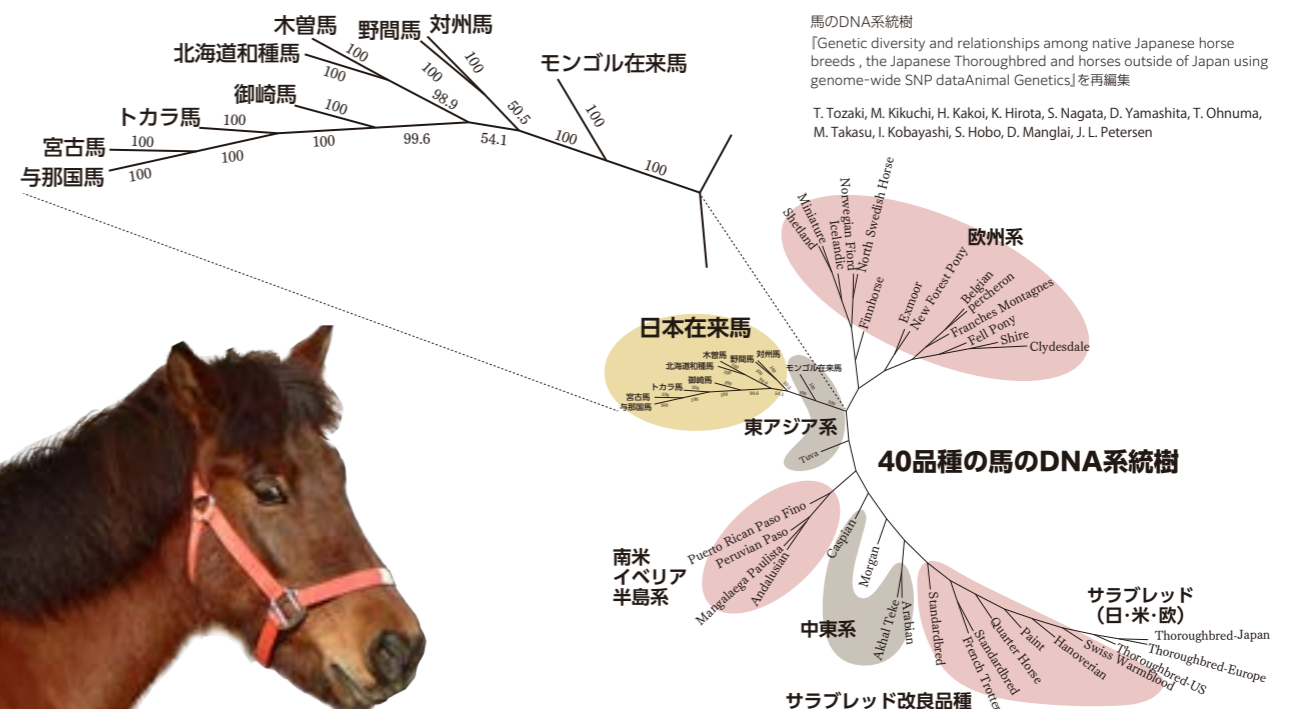
以上のことから、古墳時代に朝鮮半島から日本列島へ、九州を経由してモンゴル在来馬を祖とする馬が伝わった(単一起源説)のではないかと考えられています。

対馬と朝鮮半島との立地を考えると、モンゴル在来馬が日本全国に広がる際に、対馬を経由した、もしくは九州に渡来した馬が対馬にももたらされ、当時の馬の遺伝子が対州馬にも受け継がれているのかもしれない。

古代の史書である『続日本紀』(797年成立)には、対馬の馬が大宰府を経由して天皇に報告されたことが記されており、8世紀には対馬に馬がいたことが分かります。

これらのことを組み合わせて考えると、馬が対馬に渡ってきたのは4-8世紀と推論できます。現在、対馬からは馬骨など馬の存在を示す遺物は出土していませんが、今後、対馬から馬骨や馬の歯などの直接的な遺物が出土すれば、より詳細なことが分かってくるかもしれません。

#### ◆ 日本8在来馬の分布



遺伝学から見た対州馬



## 馬の伝来と古墳時代の対馬

朝鮮半島から日本列島への馬の伝来はいつ頃のことでしょうか。現在、研究者の間では5世紀前半(古墳時代中頃)に「本格的な伝来」があったとされ、それ以前にも「散発的な伝来」があったという考え方が主流になっています。

朝鮮半島からもたらされた馬文化は急速に九州から東北地方にまで広がります。馬が早期に到来した北部九州のなかでも、福岡や熊本などの古墳には馬を連れてやってきた渡来人の影響を受けたと思われる特徴的な遺物が残されています。

朝鮮半島と九州の中間に位置する対馬がその経由地として大きな役割を果たしたと考えることは立地の上からも想定できます。ここでは、北部九州を中心に馬に関する遺物と対馬の出土品をみてみましょう。

### ◆『日本書紀』にみる馬の伝来

馬の伝来や生産に関する古い時代の記述が『日本書紀』には散見されます。そのなかで、応神天皇15年条には、百済王が阿直岐を遣わして良馬2頭を献じたという記載があり、馬の伝来を記した初めてのものとなります。その馬は大和の厩坂(奈良県橿原市域)において、阿直岐に飼わせたとありますが、これも「散発的な伝来」のひとつと考えられます。

次に出てくるのは履中天皇5年条ですが、そこには「河内の飼部」という馬飼集団が登場します。馬飼は馬に関する知識を持った渡来人という説が有力です。現在の大阪府四條畷市や寝屋川市周辺に牧場が経営されていたと考えられ、四條畷市の奈良井遺跡(古墳時代中期～後期)からは埋葬された6頭以上の馬の骨や馬具類が出土しています。

### ◆埴輪になった日本の馬

埴輪の登場は3世紀からとされ、家型埴輪や鶏形埴輪といった「形象埴輪」が造られるようになったのは4世紀に入ってからと考えられています。

馬形の埴輪が登場するのは5世紀に入ってからで、各地の古墳から飾り馬を模した埴輪が出土しています。

そのなかで、5世紀前半頃とされる福岡県田川市の古墳からは写実的な馬型埴輪※1が出土しており、当時の馬のリアルな姿を伝えてくれます。

### ◆装飾古墳に描かれた馬

古墳や横穴内の壁や石棺に浮き彫り、線刻、彩色などの装飾が施された装飾古墳の半分以上は九州のみで見られます。そのうち、馬が描かれた古墳や横穴は6世紀前半から後半にかけて九州に集中しており、20基ほど確認されています。

また、石馬(石製の馬)などを古墳に並べる個性的な馬文化も福岡県や熊本県、大分県の各地にありました。

### ◆対馬から出土した馬鐸

対馬では、弥生時代後期とされる佐保のシゲノダン遺跡から、青銅製の馬鐸が出土しています。福岡の弥生時代後期～古墳時代初頭(3世紀後半)とされる雀居遺跡からも馬鐸が出土しています。

馬の胸にさげる馬具の一種である馬鐸は、古墳時代の多くの遺跡で出土していますが、対馬や九州北部では地理的な優位性により、他よりもいち早く馬文化の一端に触れる機会があったようです。対馬の馬鐸は朝鮮半島由来のものと考えられていますが、出土数や他の出土品などから、対馬での馬の存在を確実視するには至っていません。

応神天皇15年	百済王が阿直岐を派遣して良馬2頭を献上、厩坂で飼育する
履中天皇5年	「河内飼部」という馬飼の集団に入れ墨を行うことを止めさせる
継体天皇6年	穂積臣押山を百済に派遣し、筑紫国の馬40頭を贈る
欽明天皇7年	百済の使者が帰国する際、良馬70頭と船10隻を贈る
欽明天皇14年	百済に良馬2頭、諸木船2隻、弓50張、箭50具を贈る
欽明天皇15年	百済に援軍として兵1千人、馬1百頭、船40隻を派遣する
欽明天皇17年	百済王子の患が帰国する際、多くの武器や良馬を贈る

#### 『日本書紀』の馬の伝来・生産に関する記述(7世紀以前、抜粋)

倭と百済とは積極的な交流を持っていましたが、6世紀に入ると倭から百済に多くの馬が贈られており、この頃には相当数の馬が日本列島にいたと考えられます。『日本書紀』には「馬飼」の人名が散見されるようになり、馬の生産や飼育に関わる集団が活躍していたことが窺われます。



※1 猫迫1号墳の馬型埴輪(5世紀前半頃)  
提供 田川市教育委員会



竹原古墳の壁画(6世紀前半頃)  
提供 宮若市教育委員会



王塚古墳の壁面(6世紀後半頃)  
提供 九州歴史資料館



岩戸山古墳の石馬(6世紀前半頃)  
提供 八女市教育委員会



対馬のシゲノダン遺跡から出土した馬鐸  
弥生時代(後期)1～3世紀、青銅製  
提供 東京国立博物館

## 古代の文献に登場する対馬の馬

### 謎の多い古代の対馬の馬

対馬における古代の馬の存在は考古学的な発見に恵まれず、不明な点が多いのが現状です。しかし、奈良時代の天平年間に対馬産の馬について朝廷に報告されており(『続日本紀』天平11年(739)3月癸丑条)、その存在を窺うことができます。

平安時代には「刀伊の入寇」によって多数の馬や牛が賊徒に殺される被害があり(『小右記』寛仁3年(1019)6月29日条)、また、高麗国との交易品にも馬や牛が登場しており(『高麗史』寛治元年(1087)秋7月条)、対馬における馬の広がりをみいだせます。

対馬への馬の伝来は想像するしかありませんが、古代国家の支配体制が構築されるなかで、地域での馬の利用が進み、馬文化も定着していったと考えられます。まずは古代の馬の用途を概観し、その上で対馬での馬の利用をみていきましょう。

### ◆天皇に報告された対馬の馬『続日本紀』

「聖武天皇の言葉」  
これは先祖の助けであり、土地の神と五穀の神の贈り物である。このような瑞をどうしてひとりだけで受けることができようか。天下の人々と一緒にこのふのが道理である。したがって、親孝行な子や祖父母によく従う孫、高齢者、妻を失った男性、夫を失った女性、孤児、一人暮らしの老人、病気で暮らしていけない人々に物を与えて救済せよ。それから祥瑞の馬

「治部卿の茅渚王らの奏上」  
大宰少式である多治比真人伯耆の申上によれば、「対馬島の目(国司の一員)である養徳馬飼連乙麻呂が獲た馬は体が濃い青味を帯びている黒色で尻尾とたてがみが白色である」と言上しています。私たちが瑞兆について書かれている「符瑞図」で調べたところ、この毛色の馬は神馬です。聖人が政治をとり、財貨や服装に節度がある時には神馬が現れるとあります。これはまさに大瑞に相当します。

を進上した当人の位階を五階上げて、物を与えよ。馬が出現した郡の今年の庸と調は免除し、その他の郡は庸のみ免除せよ。また、対馬の国司の史生以上にも物を与えよ。人々は朕のこの思いをよく理解して従うように。  
※藤木孝文「徳政」『続日本紀』(東洋文庫四九〇九)一九八七年を参考に意訳しています。



対馬の神馬のイメージ 馬の博物館 蔵「十毛集」の図を改編

### ◆国家的な馬の利用

馬は「乗る、載せる、牽く」ための動力として人々に広く用いられ、「より速く、より遠く、より多く、より強く」という人類の要求に応えてきました。

さらに動物資源としても重用され、馬体そのものも余すことなく用いられました。国家的にも軍事や交通の面で重用される生き物となり、権威の象徴にもなりました。貴重であるがゆえに、儀式や祭祀などにも幅広く用いられました。

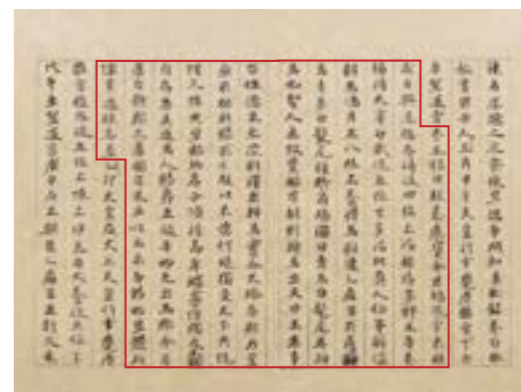
国家的な用途としては、まず軍事面では、軍団における騎乗用の騎馬や駄載用の駄馬が規定されていました。

交通の面では、駅伝制に関する馬として駅家に配置される駅馬、郡家に配置される伝馬があり、情報の伝達や使者の往來を担いました。また、調庸や贄といった貢納物の輸送、重量物の運搬にも人担や船、車などと共に馬が用いられました。



15世紀頃に描かれた騎乗した女真族  
Wikipedia:Jurchen peopleより切り抜き

対馬、香岐や九州北部を襲った「刀伊の入寇」は女真族一派によるものとされています。対馬では多くの人々が殺戮や拉致にあい、また、82頭の馬が食べられてしまったと報告されています。



赤枠が対馬の馬を報告した記録  
※1『続日本紀 巻13』(慶長19年写本) 選者:菅野真道 該当部分を接続編集  
国立公文書館デジタルアーカイブより

### 祥瑞の報告義務

神馬は「祥瑞」のひとつでした。祥瑞とはめでたいまえばれの物や事象のことで、「儀制令」という法律(大宝令・養老令)には祥瑞と思われる物を発見した場合、手続を経て天皇へ報告しなければならないという決まりがありました。祥瑞は王者に徳があった場合、天がそれを賞して徴をあらわすという思想です。祥瑞には奇異な動植物や自然現象のほか、実際に存在しない想像上のものも含まれていました。

そして、国家支配に携わる官人は文官・武官問わず、馬に乗れることが求められており(『日本書紀』天武13年(684)閏4月条)、平安貴族達も馬に乗れることが前提でした。

馬に乗ることは身分の高さを示すことでもあり、そのため、乗馬中に身分の高い人に出会ったら馬を下りたり、脇によけることが求められました(『令義解』儀制令在路相遇条・遇本国司条)。また、国府や郡家といった国家支配の施設には官人の乗用や荷物の積載のために公用の馬が備えられていたと考えられます。

これらの馬の多くは公的な牧である「官牧」で生産されました。乗用に適したものは調教のために軍団兵士のもとに送られて育成され、官人や兵士が乗るための馬として各所に配分されました。

## 律令制度と対馬の馬

対馬で必要とされた馬の利用をみてみましょう。

### ◆ 対馬の防人と馬

対馬は対外防衛の拠点の一つであり、兵士である防人<sup>さきほ</sup>や防衛システムである烽<sup>とほひ</sup>が置かれ、国のまもりを固めていました。

国を守る兵士は10人で一火という単位に組織され、そこには6頭の駄馬が配備されるようになっていました(『令義解』軍防令兵士為火条)。辺要の守りにつく兵士を「防人」と称しますが、(『令義解』軍防令兵士向京条)、彼らにも駄馬が用意され、また私馬を連れ行くことも可能でした(『令義解』軍防令防人向防条)。

### ◆ 対馬の駅伝制と馬

古代の交通制度では馬が重要な役割を果たしました。軍事的、緊急的な情報を伝達する駅制では、馬が高速の移動を支えました。しかし、平安時代の駅制について記す『延喜式』には対馬の駅家や駅馬の記載がなく、駅馬の存在は不明です。対馬にも駅子の存在が認められますが(『延喜式』主税寮上・佐渡等駅子条)、海を渡る使者のために用意されており、対馬島内に駅馬が置かれていたかは確実ではありません。

一方、伝馬は中央から派遣された使者のために各郡に5頭ずつ置くことが規定されており(『令義解』廐牧令置駅馬条)、対馬でも上県郡と下県郡の郡家に置かれていたと考えられます。

### ◆ 対馬に運ばれる米と馬

対馬は島であるため、島外との連絡は船が用いられましたが、島内の移動、特に物を運ぶ際には馬が用いられたと考えられます。外から対馬に大量に運ばれるものとして、食料が考えられるでしょう。対馬は水田耕作に適しておらず畑ばかりで(大江匡房『対馬貢銀記』)、食料となる米は島の外から運ぶ必要がありました。

そのため、島司(国司)や防人の食糧として毎年2千石の「穀」(未精白米)が九州各国から運ばれていました(『延喜式』主税寮式上・対馬粮条、雑式・運漕対馬粮条)。それらを港から国府や防人の拠点(金田城など)に運ぶために駄馬が用いられていたことが想像できます。

### ◆ 対馬から運ばれる銀と馬

対馬から島外に運ばれたモノに銀があります。銀は対馬の調物(特産品)と規定されており(『延喜式』主計寮上・対馬島条)、大宰府を経由して京に運ばれていました。

鉱山から積み出し港まですべて人が担いで運搬していたとは考えにくく、駄馬の存在が想像されます。

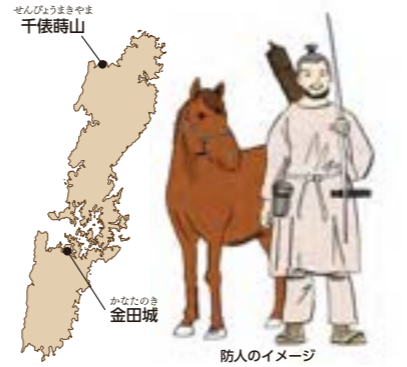
739(天平11)年に馬の負担を軽減するべく、駄馬の積載量は150斤(3俵、約90kg)と決められました(『続日本紀』天平11年4月乙亥条)、それでも人担より多くの荷物を運ぶことができ、かさばるものや米や銀のような重量物を運ぶには重宝されたと考えられます。そのため『延喜式』にはそれらを馬で運ぶ際の目安が記されています(『延喜式』主税寮上・駄荷条)。

### ◆ 広がる馬文化と対馬

官人が移動する際には馬に乗っていたと考えられます。対馬でも国司や上県・下県の郡司など、身分の高い人々は馬に乗って島内を移動したり、支配領域を視察していたことでしょう。

以上は国家的な用途として、律令格式や他国の例をもとに想定した馬の使われ方です。一方で、馬の生産や利用は国家的な用途に限定されるのではなく、奈良時代には民間でも広く用いられるようになっていました。そのため、民間の馬は帳簿で管理され、必要に応じて徴発されるようになっていました。

そして、馬は一般においては農耕や種々の運搬といった日常の動力として、なくてはならない生き物でした。対馬においても、人々の生活のなかで馬が用いられ、広まっていたと考えられます。



防人は663年の白村江の戦い以後制度化され、諸国の兵士の中から3年交代で選ばれ、筑紫・吉野・対馬といった九州北部の防備にあたっていました。対馬では、金田城や千俵崎山などに配備されたと考えられます。



馬で兵糧を運ぶイメージ



銀山神社

写真提供 対馬観光物産協会  
対馬の銀山は日本最古とされ、天武天皇3年(675)に対馬の国司忍海造大國が島で産出した銀を朝廷に献上したことが『日本書紀』にみえています。『延喜式』には銀山神社・銀山上神社が記されており、採掘の地である椗根には、現在でも創建年不明の銀山神社があります。



『志貴山縁起』[2]写 寛献ほか 一部切り抜き  
国立国会図書館デジタルコレクションより

「信(志)貴山縁起絵巻」(平安時代末期)には騎乗した男性のほか、馬に乗る老女の姿も描かれています。また、『伴大納言絵巻』(平安時代末期とされる)には、騎乗の検非違使が描かれ、『彦火々出見尊(ひこほほでのみこと)絵巻』(平安時代末期)には「みつきものたてまつるところ」と書かれ、買物を載せた馬の姿も描かれており、さまざまな場面で馬が使われている様子が確認できます。

## 朝鮮外交と馬

### ◆ 馬を使った外交

宗貞茂は、建国間もない李氏朝鮮との通交により対馬の安定的支配を図った第9代当主です。

貞茂はそのころ朝鮮半島や中国大陸で船や倉庫、人など襲っていた倭寇とよばれる海賊の積極的禁圧の方針を打ち出し、互いの通商の促進や李氏朝鮮との信頼関係を築きました。対馬は倭寇の拠点の一つでした。

1399(応永6)年に貞茂は対馬の当主になったことや、朝廷により倭寇対策が取られている内容の信書を送っています。この時、贈り物の中に含まれていたのが馬6頭です。

乗り物としてだけでなく、軍事的に利用できる馬は贈り物として高い価値がありました。宗貞茂から貞国までの約100年間に李氏朝鮮との通交に馬が登場するのは39回にもおよびます。

このように対馬と李朝とのその後の関係は、物品や馬や珍獣の相互の贈答に象徴されるように比較的安定していました。



**引き出物の語源**  
引き出物は、平安時代頃、馬を庭に引き出して贈ったことに由来する。馬の代わりに「馬代」として金品を贈るようになり、引き出物は酒宴の膳に添える物品や、招待客への土産物をさすようになった。  
〔語源由来辞典より〕

### ◆ 江戸時代の日朝関係と馬

豊臣秀吉の朝鮮出兵によって日朝間の外交と貿易は途絶えてしまいましたが、宗義智らの尽力によって朝鮮から回答兼刷還使(朝鮮通信使)が派遣され、己酉約条が結ばれました。その後、柳川一件を経ることで、対馬宗家による外交・貿易体制が再編され、明治維新までの体制が継続されました。

日朝間における馬のやりとりは江戸時代でも確認できます。例えば、将軍の代替わり等に派遣された朝鮮通信使は徳川將軍家への献上品として朝鮮馬や朝鮮馬を連れてきました。また、対馬宗家が徳川將軍家や諸大名に輸入した朝鮮馬を献上・贈答することもありました。なかでも、8代将軍・徳川吉宗は馬を好み、対馬藩に度々馬を要求しました。朝鮮馬を求める吉宗に対して、宗家は1724(享保9)年には朝鮮の栗毛牡馬1頭と青駁馬1頭を、1725(享保10)年には牡牝2頭の朝鮮馬を献上しています。さらに、吉宗は韃靼(たつたん)の馬(清国の馬)を朝鮮経由で手に入れるよう要求してきましたが、対馬藩側は清が軍用馬を他国に輸出することを禁じていること等を理由に断っています。

一方で、日本の馬を朝鮮へ輸出する事例も確認できます。江戸時代においても馬は日朝外交・貿易を支える重要な動物だったので。

## 対馬と李朝間の通交に登場した馬

	授者	受者	種類	数
1399(応永6)年	宗貞茂	定宗	馬	6頭
1400(応永7)年	宗貞茂	定宗	馬	10頭
	靈鑑	定宗	馬	6頭
	靈鑑	定宗	馬	6頭
1401(応永8)年	靈鑑	太宗	馬	6頭
	靈鑑	太宗	馬	4頭
	靈鑑	太宗	馬	4頭
1405(応永12)年	宗貞茂	太宗	馬	10頭
1408(応永15)年	宗貞茂	太宗	馬	3頭
	宗貞茂	平道全	馬	2頭
1417(応永24)年	太宗	宗貞茂	黒驄(茸毛)大馬	
1443(天靖元)年	千代熊丸	世宗	馬	2頭
	世宗	宗盛家	鞍馬	
1444(文安元)年	世宗	宗貞盛	鞍馬	
	世宗	千代熊丸	去勢馬	1頭
1447(文安4)年	宗貞盛	世宗	馬	1頭
	宗貞盛	世宗	馬	2頭
1449(宝徳元)年	宗盛直	世宗	馬	不明
1450(宝徳2)年	文宗	宗盛家	鞍馬	
1454(享徳2)年	端宗	宗成職	馬	1頭
1464(寛正4)年	宗成職	世祖	馬	2頭
1472(文明4)年	成宗	宗貞国	馬	1頭
1481(文明13)年	成宗	宗貞国	馬	2頭
1486(文明18)年	成宗	宗貞国	馬	1頭
1487(長享元)年	宗貞国	成宗	青毛馬 栗毛馬	1頭 1頭
1490(延徳2)年	宗貞国	成宗	馬	2頭
	宗貞国	成宗	青毛馬	2頭
1491(延徳3)年	宗貞国	成宗	京馬	不明
1492(明応元)年	宗貞国	成宗	馬	1頭
1493(明応2)年	宗貞国	成宗	黒毛馬	2頭
1494(明応3)年	宗貞国	成宗	馬	1頭

■ 対馬から李氏朝鮮へ  
■ 李氏朝鮮から対馬へ

〔15世紀の日朝間で授受した禽獣〕 國原美佐子著より対馬分を抜き出し



## 対馬の牧

牧とは、ウマを生産・飼育するために設置された場所のことです。ここでは、中世から近世にかけて存在した対馬の牧の歴史について紹介します。

### ◆ 室町時代の牧

対馬における牧の歴史は室町時代までさかのぼることができます。「海東諸国記」には、1443年(嘉吉3年)の時点で対馬には宗氏の牧が四ヶ所あり、2000頭余りのウマがいたとされています。この四ヶ所の牧が現在のどこにあたるのは不明ですが、1580(天正8)年の「仙巢稿」(景輦玄蘇 著)には長崎(現在の豊玉町)に「牧山」があったことが記されています。

※景輦玄蘇は1580年(天正8年)対馬国宗義調の招きにより対馬島に渡り、日本国王使として朝鮮外交を行った臨濟宗中峯派の僧。

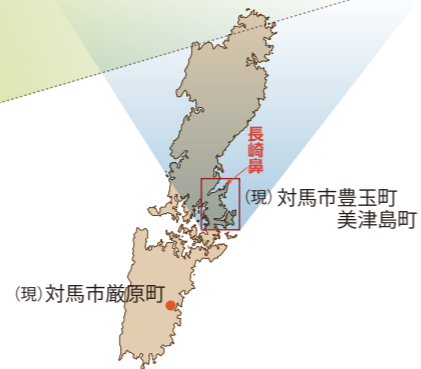
### ◆ 江戸時代の牧



「濃部御牧之絵図」(対馬宗家文庫史料)

江戸時代に入ってから対馬藩直営の牧は横浦の長崎を中心に設定されていましたが、1690年頃(貞享～元禄期)に長崎が牧の範囲から外されました。その際に牧の境界として築かれた石垣が「豊玉の猪垣」と考えられています。その後、「猪鹿逐詰」(1700～1709年)を実施するために牧の範囲は小船越村から濃部村にかけて地域へと縮小されました。この時期の牧を描いたと考えられるのが「濃部御牧之絵図」です。同絵図をみると、牧は立山(対馬藩直営の山。一般による草木の採取が禁止された)や耕作地(「作場」)を避けて設定されたことが分かります。なお、「御牧馬并ニ御預ケ馬帳」(対馬宗家文庫史料)に記される多様な毛色のウマはこの牧で飼われていたものです。

1724(享保9)年には牧が府中(現在の厳原町)周辺へと移転しました。この牧は上ミ山牧と下モ山牧に分かれており、足軽や百姓から選出された牧別当という役人が管理していました。宗家文庫史料の絵図によると、上ミ山牧は「上ミ見坂」(現在の見坂公園付近)を中心に、下モ山牧は有明山から月輪山にかけての地域に存在したことが分かります。この二つの牧は対馬藩のウマを生産・飼育する場として幕末維新期まで存続しました。



牧の遺構と考えられている「豊玉の猪垣」  
豊玉町塩浜の西南の尾根に、東西約240mにわたり、高さ1.1m、上幅0.6m、下幅1.2mの石垣が築いてある。

## 朝鮮通信使と馬



ユネスコ「世界の記憶」 朝鮮国信使給巻 上巻(部分) 道中行列図 長崎県対馬歴史センター所蔵

### ◆ 迎送馬による通行支援

江戸時代、日本と朝鮮国の善隣友好の使節として12回来日した朝鮮通信使は、そのうち10回を漢城(現在のソウル)から江戸まで往復しました。その路程のうち山城淀から江戸までは陸路を通行しました。大坂に残留した100～130人を除いた360～380人程度の朝鮮通信使の移動には大量の迎送馬が必要とされ、

幕府は全国の大名に提供を命じました。1719年、9回目の来日時では1日あたり上馬80疋、中馬180疋、乗掛馬104疋の合計364疋が朝鮮通信使の通行に用いられ、これに荷馬や随行警固する対馬藩の乗馬・荷馬を加えると1日あたり800疋を超える馬が必要とされました。

(註) 上馬は体形の優れた乗馬用の鞍置馬、中馬は鞍背具を載せ乗馬用とした荷馬、乗掛馬は荷物と人を同時に載せた荷馬。

### ◆ 馬上才による朝鮮曲馬

朝鮮曲馬の騎手である馬上才は、寛永12年(1635)に来島した訳官使に同行して初来日し、江戸まで赴いて徳川三代将軍家光に曲馬を披露しました。家光は朝鮮国の馬芸や馬に強い関心を示し、その来日を熱望していました。馬上才は翌年来日した4回目の朝鮮通信使から使行員に加えられ、江戸で曲馬や射芸を披露することが慣例となりました。

朝鮮曲馬は、朝鮮半島で進化した実践的な騎馬術であり、馬上才の来日は日本の馬芸の発展に大きな影響を及ぼしました。また、その物珍しさや高度な技芸から日本人に拔群の人気を誇り、江戸城での将軍上覧、上野での射芸のみならず、対馬藩江戸藩邸で行われた下乗(乗り慣らし)にも諸大名、幕閣などが見物に訪れました。



馬臂上仰臥



馬上倒立



雙馬



馬上立押扇

ユネスコ「世界の記憶」 馬上才図巻(部分) 松原一征コレクション

### ◆ 朝鮮馬の献上

江戸時代、朝鮮通信使は12度来日しましたが、4度目の来日から朝鮮国王が徳川将軍やその世子に贈る礼単(進物)の品目に朝鮮馬が加えられました。こちらも馬上才の来日と同様、徳川家光が熱望したものでした。



ユネスコ「世界の記憶」 朝鮮国書別幅 (1748年来日) 東京国立博物館所蔵  
品目の最後に「駿馬貳匹 鞍具」とある。



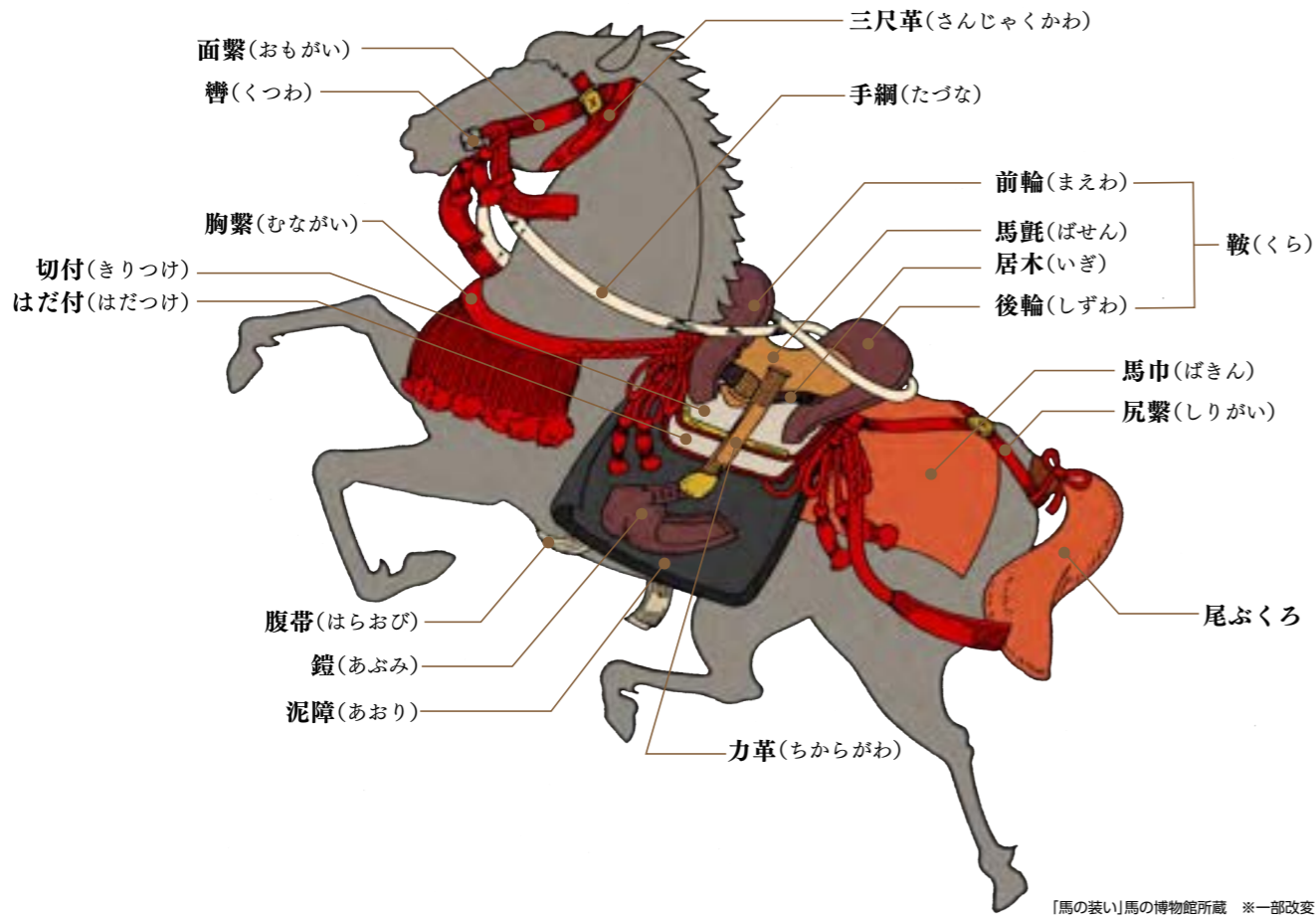
朝鮮来幣絵巻(部分) 真田宝物館所蔵  
1748年来日した朝鮮通信使を画く。将軍および世子への献上馬各2疋と芸馬2疋の合計6疋の朝鮮馬がみえる。

### ◆ 朝鮮通信使と対馬の馬

文化8年(1811)、対馬易地聘礼のために来島した朝鮮通信使と交流した草場佩川は、その時の様子や成果を「津島日記」として遺しています。日記には朝鮮通信使行列に使用された馬について次のように記されており、対馬での行列に対馬で生産された馬が使用されていたことがわかります。

対馬ノ牧産ノ馬ハ土佐駒ニ似テ小サシ、サレドモカアリテ能重キニ勝タリ、摠シテ韓人ハ魁梧ナル上ニ旗鉞ノ重ミヲ加ヘテハ、凡馬ノ勝ヘサル所ナリ  
「津島日記」草場佩川

# 馬の装い対馬藩士の



「馬の装い」馬の博物館所蔵 ※一部改変

## ◆日本の馬具

日本の伝統的な馬具は、多くの装具からなり、木工、漆工、金工、革・布などを集約した日本独特の美術工芸品です。轡は、鉄鍛造で、面懸に結び、手綱と合わせて、馬の制御に欠かせないものであり、三尺革(縄)は、面懸を補強する役割があります。鞍は前輪、後輪、居木の三つの木製部分からなる鞍橋を主体とし、布や革製のクッションを組み合わせた切付・膚付、障泥、馬氈が付属します。日本の鑑はスリッパ型であり、世界の他のエリアには見られない、ユニークな形をしています。

## ◆対馬藩士の馬具

ここに紹介する馬具は、戦国時代後期から江戸時代にかけて使用された対馬藩の武家の馬具一式で、日本伝統の馬具を継承しており、各大名家の中でも、実用のほば装具(皆具)の揃ったものとして、極めて貴重なものです。今回は展示されていませんが、馬具の装具のなかには、障泥に、青海波の模様や波濤を表した、対馬の位置する環境の独特の文様が見られるものもあります。また宗家に由来する鞍の中には、インドなどの象牙を利用した梅花皮<sup>※1</sup>をあらわした珍しい梅花皮写象牙張鞍<sup>※2</sup>など国際的な交易を示す馬具が見られます。

※1 南シナ海に生息する特殊なエイの背の皮  
※2 常設展示室

鑑は力革で鞍から吊るされます。近世の鞍・鑑には漆塗で様々な図柄の蒔絵が施され、鞍の固定は、前後のずれを防ぐ胸懸、尻懸があり、布や革製の腹帯で鞍を馬の身体に固定します。障泥は、衣服の泥除けともなり、馬氈は、乗手の腰を下ろす居木上に置く敷物のことです。



梅花皮写象牙張鞍  
長崎県対馬歴史研究センター寄託・個人蔵



① 鞍・鑑一双(装具) 江戸時代

対馬市教育委員会文化財課 所蔵

木製の鞍は、前輪・後輪の表側に段差があり、薄い部分を海、厚い部分を磯と呼ぶ水干鞍(武骨な軍陣鞍に対し、装束を着用して騎乗する鞍)の特徴を示す。

前輪・後輪の表面、居木の表面、鑑の表面に蒔絵などの加飾はないが、黒漆に朱やベンガラを混合し茶系の漆の伝統色、潤塗でまとめられている。

② 龍蒔絵鞍(装具) 江戸時代

対馬市教育委員会文化財課 所蔵

中国では、龍は帝王の象徴とし、歴代の皇帝の意匠ともされ、また機会を得て活躍する英傑の象徴でもあった。龍は鳳凰とともに吉祥の瑞獣として日本でも好まれ、江戸時代の刀装具や馬具の意匠として好まれた。木製鞍の前輪、後輪の表面に黒漆塗で雲間に天に昇る勇壮な龍が金高蒔絵で表されている。馬氈、切付・はだ付、障泥、それぞれが白革の皴革に、紅葉賀(源氏物語)を金箔押しで表し、縁は金箔の覆輪縫いとしている。鑑を吊るす力革が付属、三尺革も白革包で金箔押しの五割菊に菊を表している。



紅葉障泥

③ 枝橋散し鞍・鑑一双(装具) 江戸時代

対馬市教育委員会文化財課 所蔵

対馬府中藩重臣のものと思われる鞍具。鞍と鑑には、漆塗りに枝橋散し文様を金蒔絵で華麗に表している。鑑を吊るす力革は、居木から、切付と膚付の間に通し、枝橋文様の鑑を下げる。鞍上には敷物の馬氈がある。

面懸の首掛けに結び、頭絡が外れるのを防ぐ三尺革には、白革に金箔押しで対馬府中藩、『五七桐』の家紋を表し、表腹帯(上腹帯)には金箔押しの皴革に唐草模様の装飾が施されている。



枝橋散し鞍・鑑一双(装具)

障泥 江戸時代

対馬市教育委員会文化財課 所蔵

この障泥は龍蒔絵鞍(装具)とセットで使用されたものであり、白革の皴革に、紅葉を金箔押しで表し、縁は金箔の覆輪縫いとしている。下部に鑑があたってできたと思われる使用痕が見られる。

**尻懸の覆飾り** 江戸時代

対馬市教育委員会文化財課 所蔵

<表面>

撚った糸を染料で染め、輪違いつがり(輪を交差させ連続模様としたもの)で編み込まれている。金箔押しおちがの革おちがの覆輪おちがで留め、二段とし、中央には飾り結びの一つ、あわじ結びを三か所に縫い付け、飾りとしている。

<裏面>

麻布を張り、外側の覆論から下げる麻糸を、朱・藍・黄色に染め連着飾りとしたものである。武家の鞍の後輪しおでの鞍しおで(四緒手)に結び、尻懸を覆う装飾として利用されたと考えられる。



朝鮮国信使絵巻に描かれた、尻懸の覆飾りを思わせる馬具



尻懸の覆飾り

**手綱付き轡** 江戸時代

対馬市教育委員会文化財課 所蔵

**轡**

轡は、日本の伝統的な呼び名で、乗用の際、手綱と結んで馬を制御するのに欠かせない馬具である。江戸時代の轡には、家紋や動物、吉祥紋などを施したものが多く見られる。

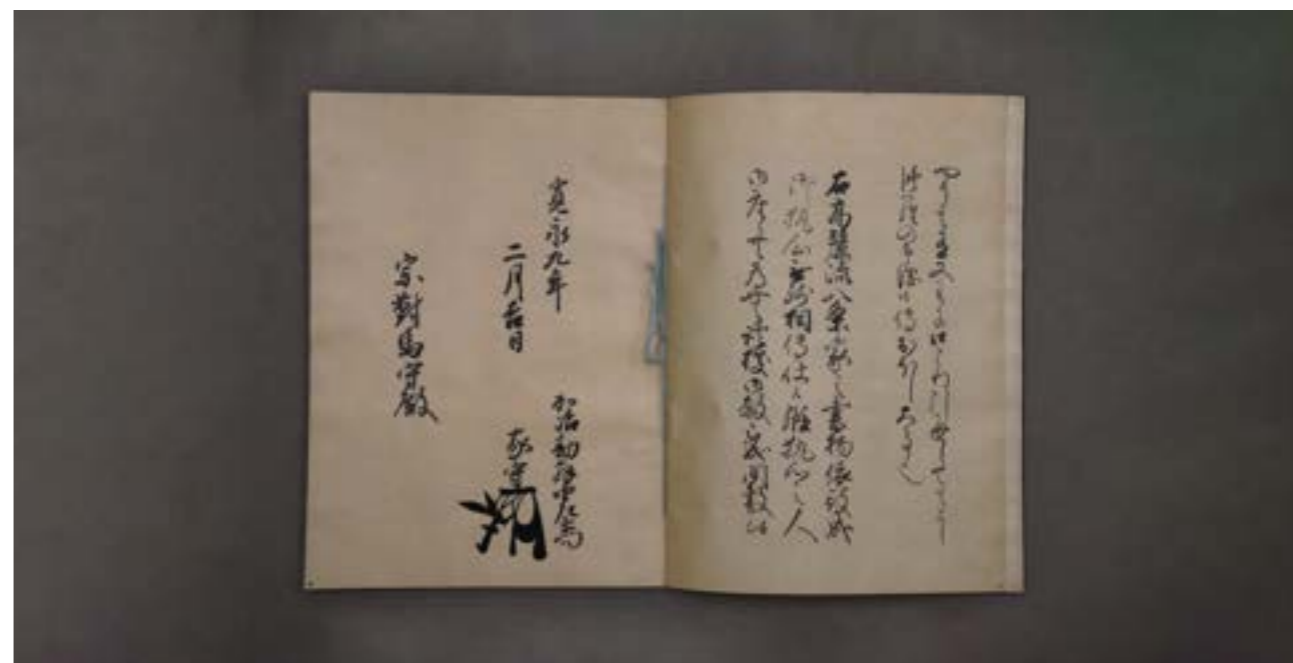
**手綱**

轡を馬の頭部に留める面懸は、古くは革製で、現代でもほとんど革製の紐を用いるが、手綱は、日本では平安時代以降は、布をたたんで用いた。この使用された手綱付きの轡は、轡の引手に紫と白で斜めに段染した手綱を結び、立間に糸組たしきの房飾りふさがある。



手綱付き轡

**宗家の馬術資料**



上之上第一 1632(寛永9)年

2代藩主義成が、將軍秀忠・家光の乗馬の先生であった旗本・中山照守から八条流馬術を伝授されていたことがわかる。

◆ 宗家旧蔵馬術関係資料

馬の博物館が所蔵する「宗家旧蔵馬術関係資料」は、2代義成・10代義暢・11代義功・15代義和ら歴代藩主の資料で、総点数は約320点にのぼります。

中心となる資料は、15代義和が馬術を学んだ際の免許状や馬術書です。そのほかにも騎射三物を描いた絵巻物や、藩主乗馬用の轡・太覆などの馬具も残っています。

資料の内容や箱書などから、江戸藩邸で収集された藩主の「家」にまつわる資料群だと考えられます。江戸時代、最上層の身分であった大名がどのように馬術や馬にかかわる知識を学んだのかをうかがえる点で、無二の資料群といえるでしょう。



太覆 江戸時代  
太覆は尻がいを覆う馬具。



馬養生雛型 1855(安政2)年

削蹄の様子を示した模型。15代藩主義和(よしより)が江戸で馬術を学んだ際に伝来したものと考えられる。

## 府中の馬

文化8年「対州接鮮旅館図」を編集  
〔厳原町誌〕付録 厳原町誌編集委員会を加工

## ◆ 対馬藩における馬の管理体制

対馬藩における武士の格式は高い方から馬廻、大小姓、徒士の順になっていました。馬に関する役職については時代により若干異なりますが、天保期においては、府中の馬方役所で実務にあっていたのが「御馬役」・「乗り方」・「馬医」という役職であり、格式によって就任できる役職が決まっていた。

馬役には馬廻が、乗り方には大小姓もしくは徒士が、馬医には徒士が就任することになっていました。さらに、乗り方と馬医はそれぞれの格式の中でも就任できるのは「家業」と呼ばれる特殊な技能を受け継ぐ家柄に限られました。明治以前における馬の治療は主に、鍼、灸、瀉血、焼烙、薬餌(漢方薬)によりなされていたと考えられています。

そのほか、府中には「御厩之者」や「飼口之者」と呼ばれる人々もいました。彼らは馬方役所の所属ではありませんが、宗家の馬を飼う「御厩」に直接勤務し、馬の飼育に携わっていたと考えられます。

上図の「対州接鮮旅館図」(文化8年)の中で、お城の側に御厩があったのが確認できます。江戸時代後期、現在の対馬市役所と陸上自衛隊 対馬駐屯地のあたりに厩と馬場がありました。(図の桃色)

## ◆ 預け馬と草使

江戸時代の対馬では在郷給人や足軽、百姓といった村の住人に藩牧の馬を預けることがありました。「御牧馬并ニ御預ケ馬帳」(対馬宗家文庫史料)には村へ馬を預けた事例が多く記されており、日常的に藩牧の馬が村へ預けられていたことがわかります。また、「猪鹿逐詰」に伴って藩牧の範囲を狭め、馬の数も減ったことから、1705(宝永2)年には牧の馬を佐護郷・伊奈郷・仁位郷に預けています。これらは、藩牧で飼育しきれない馬を村に預けたものと考えられます。

また、府中(厳原)で毎年宗家に献上する「草使」という人もいました。草使は八郷(豊崎郷、佐護郷、伊奈郷、三根郷、仁位郷、与良郷、佐須郷、豆酸郷)からそれぞれ選ばれ、府中で暮らしました。

献上の日になると、それぞれの草使は麻布で作った単の袴を着用し、飼養した馬を城中に引きわたしていました。

草使の主な役割は馬の飼養のほか、府中と各郷との連絡役やそれに関わる雑事でした。妻と子供も連れてきて良かったため、藩としては彼らがそのまま府中に居残らないように苦慮したようです。

やがて、献上品が馬から貨幣に替わると、草使は郷の人々の宿泊とその世話係をするようになりました。

上図は1811(文化8)年の朝鮮通信使来聘の時に描かれた「対州接鮮旅館図」を編集した図で、草使の住居が確認できます。(図の緑色)



〔天保9年対馬国図〕天保9年 国立公文書館デジタルアーカイブを編集

馬の頭数が多い村			一戸あたりの馬数			牛よりも馬が多い村			戸数が多い村		
順	村名	頭	順	村名	頭	順	村名	倍	順	村名	戸
①	豆酸	378	①	椎根	2.76	①	南室	5.33	①	豆酸	189
②	椎根	135	②	木板	2.67	②	久和	3.44	②	佐須谷	93
③	久根	110	③	瀬	2.08	③	椎根	3.00	③	志多留	66
④	今里	100	④	豆酸	2.00	④	小浦	2.89	④	鶏知	63
⑤	阿連	87	⑤	加志	2.00	⑤	根緒	2.67	⑤	仁位	62
⑥	小茂田	65	⑥	久根	1.93	⑥	阿連	2.49	⑥	三根	61
⑦	佐須奈	63	⑦	今里	1.89	⑦	洲瀬	2.27	⑦	瀬田	60
⑧	恵古	60	⑧	内院	1.67	⑧	瀨	2.25	⑧	湊	58
⑨	加志	58	⑨	阿連	1.55	⑨	久田	2.24	⑨	久根	57
⑩	榎根	58	⑩	榎根	1.45	⑩	久根	2.20	⑩	阿連	56

■ 上県郡 ■ 下県郡

文久元年「八郷村々総出来高等調帳」時の対馬の村落における馬の保有

## 対馬の馬の飼育分布

## ◆ 元禄13年対州「郷村帳」と文久元年「八郷村々総出来高等調帳」

史料	元禄「郷村帳」		文久元年「八郷村々総出来高等調帳」	
	上県郡	下県郡	上県郡	下県郡
馬の頭数	556頭	811頭	1,069頭	1,899頭
馬の総頭数	1,367頭		2,968頭	
牛の頭数	1,009頭	716頭	1,577頭	1,569頭
牛の総頭数	1,725頭		3,146頭	
戸数	1,709戸	1,683戸	1,614戸	1,935戸
総戸数	3,392戸		3,549戸	

元禄13年対州「郷村帳」と文久元年「八郷村々総出来高等調帳」の比較

## ◆ 増加する対州馬

1700(元禄13)年の郷村帳作成と1861(文久元年)の「八郷村々総出来高等調帳」を比較すると、対馬の村々で飼育されていた馬の頭数は、1,367頭から2,968頭に増加しています。

## ◆ 上県郡は牛、下県郡は馬

元禄「郷村帳」と文久「出来高等調帳」のどちらにおいても、馬は下県郡の方で牛よりも多く飼育されていました。

上県郡の豊崎郷には馬が少ないという傾向がみられますが、明治以降にも同様の傾向がみられます。また、佐須郷も牛よりも馬が圧倒的に多い地域ですが、明治以降も同様だったようです。対馬における馬と牛の分布をみても、近代の原型を江戸時代に見出すことができます。

## ◆ 馬の分布と農業

文久「出来高等調帳」によれば、下県郡西側の村落に多くの馬が集中し、豆酸、椎根、久根、今里、阿連の五村だけで下県郡の馬の4割以上が飼育されていました。

それらの村々は、西側に川が流れる比較的農業に向いた地域です。

また、上県郡の佐須奈、志多留、三根、瀬田といった戸数の多い村落にも比較的多くの馬が飼われていました。

一戸あたり二頭近くの馬が飼育されていたのも、椎根、(豆酸)瀬、豆酸、加志といった下県郡西側の村々です。さらに明治時代になると、下県郡では「牛一頭に馬二頭」のスタイルが増えています。

まだ化学肥料が日本で普及していない時代、馬の糞尿を用いて作られる厩肥は極めて重要でした。耕作地が広くなればなるほど、馬の需要は高まったのかもしれない。

## ○ 対州馬シンポジウム



会場：対馬交流センター  
日時：2023年8月26日 10:30~12:00

- ・総合司会：吉原知子（対馬市島おこし協働隊）
- ・基調講演解説：京都芸術大学准教授 河野保博  
熊本県教育委員会 丸山大輝
- ・パネルディスカッション司会：庄司 絵里加（対馬市島おこし協働隊）
- ・パネラー  
岡部 幸雄（元 JRA 騎手）  
中川 剛 氏（木曾馬保存会 事務局長）  
戸崎 晃明 氏（競走馬理化学研究所遺伝子分析課長）  
坂口 みろ 氏（初午祭馬飛ばせ騎手）  
対州馬少年倶楽部（乗馬教室）の参加児童 3名

参加人数：100名程度  
「対州馬について楽しく学ぶ」をテーマに、基調講演とパネルディスカッションを実施しました。  
パネルディスカッションでは、専門家から対馬では実施していない馬の活用方法の紹介や、具体的な目標頭数の提案がありました。対州馬少年倶楽部の児童たちは、さらに普及啓発活動を進めていきたいと、今後について思いを語ってくれました。

## ○ 対州馬乗馬体験



会場：金城櫓門前広場  
日時：2023年  
8/12 10:00-12:00  
8/26 12:00-13:00（シンポジウム参加者限定）

対馬博物館来場者が実際の対州馬に触れ、乗馬することで、対州馬に親しみを持って持ってくれることを狙い、開催期間中3回乗馬体験を実施しました。  
参加者は良い笑顔で対州馬に跨り、中には島内飼育施設へ足を運ぶ方もいらっしゃいました。



来場者へ配布のステッカー

## ○ 参考文献

- 2頁 戸崎 晃明著『ウマはどこから来てどこに向かうのか～現在の家畜馬はロシア南部のボルガ・ドン地域に起源をもつ～』Hippofile No. 91, 18-21  
平凡社『平凡社大百科事典』  
カトリン・ラトランド、デビー・バズビー著、小林朋則 訳『ウマの博物図鑑』朝日新聞社『動物たちの地球』  
末崎真澄 編著『馬と人間の歴史』
- 3頁 近藤誠司著『ウマの科学』  
カトリン・ラトランド、デビー・バズビー著、小林朋則 訳『ウマの博物図鑑』の図を改編  
平凡社『平凡社大百科事典』
- 4頁 公益財団法人 日本馬事協会HP  
山下大輔著『日本在来馬の現状と登録管理』公益社団法人日本馬事協会
- 6頁 山下大輔著『対州馬の現状と活用への視点』  
大瀧真俊著『帝国日本の軍馬政策と馬生産・利用・流通の近代化』（一社）自動車検査登録情報協会『自動車保有台数の推移』
- 7頁 一橋大学経済研究所附属 日本経済統計情報センター『明治徴発物件表集成 徴発一覧物件表 明治30年』  
石田町教育委員会 編『石田町史』  
宮本常一著『忘れられた日本人』  
月川雅夫著『写真集対馬：昭和30年代初めの暮らし』  
山森芳郎著『日本の馬と人の生活誌』
- 10頁 (社)日本馬事協会『ホースメイト』2006年7月号
- 12頁 平凡社『平凡社大百科辞典』 一部引用
- 14頁 高校教科書『生物基礎』  
近藤誠司著『ウマの科学』
- 15頁 小学館『精選版 日本国語大辞典』引用
- 19頁 T. Tozaki, M. Kikuchi, H. Kakoi, K. Hirota, S. Nagata, D. Yamashita, T. Ohnuma, M. Takasu, I. Kobayashi, S. Hobo, D. Manglai, J. L. Petersen [Genetic diversity and relationships among native Japanese horse breeds, the Japanese Thoroughbred and horses outside of Japan using genome-wide SNP data] *Animal Genetics*
- 20頁 下條信行著『南北市雑考：弥生時代対馬船載朝鮮製青銅器の意味』（『史淵』116、1979年）  
国立文化財機構奈良文化財研究所『藤原宮跡出土馬の研究』2016年  
諫山直人著『東アジアにおける馬文化の東方展開』（『馬の考古学』雄山閣、2019年）  
桃崎祐輔著『日本列島における馬匹と馬具の需要』（『馬と古代社会』八木書店、2021年）
- 21頁 茂木直人著『祥瑞に関する制度の実態』駒澤大学リポジトリ
- 22頁 福島県文化財センター 白河館模型  
『彦火々出見尊絵巻』  
松平信興著『雑兵物語』  
加唐亜紀著『ビジュアルワイド 図解 日本の合戦』2014 西東社
- 23頁 國原美佐子著『15世紀の日朝間で授受した禽獸』東京女子大学学術情報リポジトリ  
荒木和憲著『対馬宗氏の中世史』  
関 周一著『対馬と倭寇』  
永留久恵著『対馬国志』  
日野義彦著『対州馬』[対馬歴史民俗資料館報]  
山本博文著『対馬藩江戸家老』
- 24頁 丸山大輝著『天保期対馬藩における八郷の役職―「府内・田舎・旅役之所々御役名并諸役所名前帳」の紹介―』  
豊玉町誌編集委員会編『豊玉町誌』
- 25頁 草場佩川著『津島日記』
- 30頁 豊玉町誌編集委員会 編『豊玉町誌』  
厳原町誌編集委員会『厳原町誌』付録  
丸山大輝著『天保期における対馬藩府中の役所と役職』  
丸山大輝著『天保期における対馬藩における八郷の役職』  
宮本又次著『対馬藩村落の身分構成』九州大学学術情報リポジトリ  
一般社団法人岡山県畜産協会インターネット版『岡山県畜産史』昭和55年(1980年)3月
- 31頁 永留久恵著『対馬国志』  
東昇著『近世近代対馬における地誌・村明細史料とその編纂』  
月川雅夫著『写真集対馬：昭和30年代初めの暮らし』

## ○ 執筆・監修

- 14頁 戸崎晃明 公益財団法人競走馬理化学研究所 遺伝子分析課長  
国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学応用生物科学部 客員獣医学系教授  
博士(薬学)、博士(農学)
- 18頁 独立行政法人 家畜改良センター十勝牧場
- 20頁 監修：河野保博 京都芸術大学大学院准教授
- 21頁 執筆・監修：河野保博 京都芸術大学大学院准教授
- 22頁 執筆・監修：河野保博 京都芸術大学大学院准教授
- 25頁 執筆・監修：町田一仁 対馬博物館 館長
- 26頁 執筆・監修：末崎真澄 JRA馬事文化賞選考委員
- 27頁 執筆・監修：末崎真澄 JRA馬事文化賞選考委員
- 28頁 執筆・監修：末崎真澄 JRA馬事文化賞選考委員
- 29頁 執筆・監修：金澤真嗣 馬の博物館 学芸員

## ○ 画像や展示品のご提供

- |              |                |
|--------------|----------------|
| 東京国立博物館      | こどもの国          |
| 長崎県歴史研究センター  | 真田宝物館          |
| 対馬市教育委員会文化財課 | 松原一征コレクション     |
| 九州歴史資料館      | 帯広畜産大学 南保泰雄 教授 |
| 田川市教育委員会     | 対馬観光物産協会       |
| 宮若市教育委員会     | 木曾馬保存会         |
| 八女市教育委員会     | ヨナグニウマ保護活用協会   |
| 馬の博物館        | 仁位孝雄 氏         |
| 宮本常一記念館      | 大江正康 氏         |

## 日本在来馬の記憶と未来

### 対州馬

展示場所：対馬市博物館ギャラリー、講座室  
展示期間：2023年8月11日(金)～9月18日(月)  
主催：対馬市(担当：上対馬振興部上県行政サービスセンター)  
共催：対州馬保存会  
協力：西海国立公園九十九島動物園/恩賜上野動物園/富山市ファミリーパーク/長崎市恐竜博物館/公益財団法人 馬事文化財団/  
公益社団法人 全国乗馬倶楽部振興協会/大牟田市動物園/仙台市八木山動物公園/長崎県対馬歴史研究センター/八女市教育委員会  
協賛：公益社団法人 日本馬事協会  
後援：日本中央競馬会  
発行：対馬市(担当：上対馬振興部上県行政サービスセンター)  
2023年9月